

基本理念

草加市立病院は、市民のいのちと健康を守り、地域医療の中核を担うことを使命とします。

草加市立病院

— 第3号 —

平成20年7月20日発行

発行 草加市立病院

編集 経営管理課

〒340-8560 草加市草加二丁目21番1号

☎ 048 (946) 2200(代)

HP 草加市立病院 検索



記念式典(獨協大学天野貞祐記念館にて)



記念講演後の花束贈呈
(右から東京医科歯科大学医学部長 大野 喜久郎氏、
同大学医学部附属病院長 坂本 徹氏)



高元俊彦病院長によるあいさつ



病院ボランティア「クローバー」による合唱

市立病院 新たな飛躍をめざして

草加市立病院開設50周年 記念式典を開催

草加市立病院開設50周年記念式典が6月21日に、獨協大学天野貞祐記念館で行われました。当院の関連大学である東京医科歯科大学の病院長をはじめ、地域医療機関の医師、市立病院関係者など約400人が参加。市立病院の前身である草加町国民健康保険直営診療所の開設以来、半世紀の歴史を振り返り、さらなる飛躍を誓いました。

式典では、高元俊彦病院長が「医療技術者として高い目標を持ち、日々研鑽に努め、草加市民に信頼される病院として成長し続けたい」と決意を述べました。続いて東京医科歯科大学長からお祝いの言葉をいただき、同大学臨床教育研修センター長の田中雄二郎教授からは「教育病院として大学に負けない立派な医師を育成して頂きたい」と激励を受けました。

また、記念講演では東京医科歯科大学医学部長で脳神経外科教授の大野喜久郎氏が「脳卒中の診断と治療の進歩」と題して講演。脳がいかに複雑で重要な臓器であるか、また、近年の脳の検査法や脳卒中の治療法、脳卒中を引き起す原因となる生活習慣病、喫煙・飲酒の害などについて解説されました。(講演会の関連記事は3面に)

いま、市立病院と大学病院の連携で 新たな半世紀の繁栄へ

東京医科歯科大学医学部附属病院

病院長 坂本 徹



草加市立病院開設50周年、誠におめでたいと思います。政府の国民総医療費抑制政策の下、地域からは医師が引き上げ、高齢化と少子化の中で自治体病院の運営には大きな負担がのしかかっています。しかし、草加市立病院はこのような逆風を乗り越え、ここ数年で小児科の増強、産科の再開、救急部の新設など大きな飛躍を成し遂げました。

開院当時の草加市の人口約3万4千人から現在は24万人を超え、この間に日本は世界に例のない早さで高齢化が進みましたが、草加市の人口ピラミッドは30代後半と50代後半をピークとする「二重の塔」型を示し、非常に活動的な構成となっています。一方では、市職員の意識改革も進み、平成18年発表の全国自治体ランキング・生産性部門では448市区中第1位に評価されています。また、一般職の人員削減を進める中で、医療関係者の増員を確保することは、市民の健康生活確保のための行政の強い熱意が根底にみえます。

今後も草加市立病院が市民の健康増進に貢献し、大学とさらなる機能連携を深め、末永く共に発展していくことを心より祈念致します。

地域に輝く市立病院をめざして

草加市病院事業管理者(兼)病院長

高元 俊彦



草加市立病院開設50周年にあたり、これまで病院を育てていただいた草加市行政、医療関係者、市民の皆様に、ひとことご挨拶と御礼を申し上げます。当院は、昭和58年に東京医科歯科大学から鈴木文男病院長を迎えたのを契機に、大学の主要な関連病院として大きな発展を遂げ、今日の18診療科まで成長して参りました。

しかし、4年前に待望の新病院がオープンした直後から、深刻な医師不足のありを受け、産科など一部診療科が休止となつて経営状況も悪化するなど、厳しい体験を致しましたが、職員一丸となつてこの困難を乗り越えてきました。ここで草加市立病院の5年先、10年先に思いをはせれば、我々の到達点はまだまだ道半ばであります。一層の地域医療連携を進め、2次医療機関として癌、脳血管障害、消化器、循環器疾患などのセンター化構想、小児の夜間休日診療、高齢者の救急医療など、直ちに取り組みを開始しなければなりません。

これから、私たちは草加市民の健康と医療を守るという高い使命感をもち、高度な医療技術を展開できるための修練を日々重ねて参りたいと思います。



草加市立病院開設50周年記念講演 脳卒中の診断と治療の進歩

東京医科歯科大学医学部長 脳神経外科教授 大野 喜久郎

脳卒中の症状

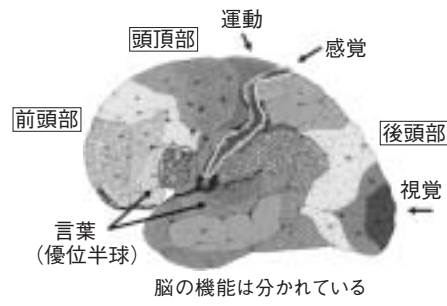
脳卒中の症状は様々で、

今回は脳卒中について話を致します。脳卒中は三大死因原因（脳卒中、がん、心臓病）の中では3位ですが、最近患者数が増加し続けています。脳卒中には脳出血（脳の血管が破れる）、脳梗塞（脳の血管詰まる）及びクモ膜下出血がありますが、食の欧米化により脳梗塞が増加しています。

今にこれというものはありません。それは脳の機能が細かく分かれているからです。例えば右の手足を動かす機能は左側の脳の表面の一部に手・指・足と部分ごとに分かれて存在します。話をすると、脳は概ね左側の前頭葉の一部にあり、また話を聞いて理解するのはやはり左側の側頭葉の一部の機能によるものです。そのため、この部分に脳卒中が起こったことによって症状が異なってくるわけです。

一方、脳の中にはあまり機能していない部位もあり、そこに脳梗塞が起こっても、はっきりとした症状は現れません。これが「かくれ脳梗塞」と呼ばれているものです。

脳ドック健診により、この「かくれ脳梗塞」の診断や、脳の血管の異常（動脈瘤の存在など）をあらかじめ知ることが可能となります。



左写真の矢印は未破裂の脳動脈瘤。右写真はクリッピング術後、瘤がつぶれている。

脳卒中の予防

脳卒中の予防は、動脈硬化につながることに留意することです。

高血圧は言うまでもなく、糖尿病や高脂血症に注意して塩分の少ないバランスの良い食事と、禁煙及び過度の飲酒を控えることが大切です。これはまさに生活習慣病を予防するということが同じ意味となります。

脳卒中の原因

脳卒中の原因の多くは高血圧です。長年続いた高血圧により、血管に動脈硬化が起こります。

若い頃ははなやかに丈夫な血管であったものが、硬くもろいものとなってしまい、血管に耐えきれず破れたり（脳出血）、壁が厚くなって詰まらせたり（脳梗塞）します。



ナースステーション（昭和50年）
現在のナースステーションとは大きく異なり、周りがガラス張りになっているものの、オープンカウンターではなく個室になっていました。

待合室（昭和50年）

待合室は大変混み合っていました。朝9時からの診察にもかかわらず、玄関前には朝6時から数十人の患者さんが並んでいました。



薬局受付（昭和50年）
当時は院内処方だったため、薬剤師が窓口で服薬指導を行い、薬を手渡していました。

会計窓口（昭和52年）

会計業務で電卓やそろばんを使用していたため、窓口では2～3時間待ちは当たり前な時代でした。



市立病院落成式（昭和42年）
病院の新築工事が完成し、昭和42年6月20日には病院関係者を招き、落成式が行われました。



広報そうか（昭和41年12月発行）



あの頃を振り返る

草加市立病院のあゆみ

草加市立病院の前身である「草加町国民健康保険直営診療所」が開設されてから今年で半世紀。この間、病院は大きく変貌を遂げました。昭和33年5月、同診療所は内科・外科・産婦人科、病床数2床でスタートしました。以後、急激な人口増加とともに病院の利用者も増えたため、病院の増改築工事を行い、昭和49年3月には病床数209床を有する地域の中核病院となりました。

この間、診療科に小児科や整形外科も加わりました。さらに、眼科、皮膚科、胃腸科、耳鼻咽喉科、循環器科も加わり、昭和62年12月には総合病院の承認を受けました。そして、平成16年7月、現在の場所に新築移転し、18診療科、病床数366床の新市立病院に生まれ変わりました。当院は、今後も市民の皆さんのいのちと健康を守るため、さらなる医療サービスの向上に努めていきます。

旧市立病院（昭和43年）

昭和42年6月に一般病床が100床となりました。なお、同年4月には地方公営企業法の財務規定等の適用を受け、名称を「草加市立病院」と改めています。



旧市立病院全景（昭和49年）



病院の変遷

- 昭和33年5月 草加町国民健康保険直営診療所開設（所長・副島圭一氏 内科・外科 産婦人科 病床2床）
- 昭和36年2月 草加市立病院開設 病床25床
- 昭和39年2月 救急告知病院三好栄一病院長就任
- 昭和41年10月 伝染病舎併設（30床）
- 昭和42年4月 草加市立病院に名称変更 地方公営企業法一部適用（財務、小児科設置）
- 昭和42年6月 病床100床
- 昭和48年8月 整形外科設置
- 昭和49年1月 津崎滋病院長就任
- 昭和49年3月 病床209床
- 昭和51年6月 眼科設置
- 昭和52年11月 皮膚科設置
- 昭和54年7月 人間ドック開設
- 昭和55年4月 胃腸科設置
- 昭和55年7月 耳鼻咽喉科設置
- 昭和56年7月 病院運営審議会設置
- 昭和58年4月 鈴木文男病院長就任
- 昭和58年7月 循環器科設置
- 昭和62年4月 重症者の看護 収容実施承認
- 昭和62年12月 総合病院の承認
- 平成2年4月 泌尿器科設置
- 平成3年4月 八重樫寛治病院長就任
- 平成4年5月 新市立病院検討委員会設置（市企画財政部内）
- 平成8年5月 院外処方開始 眼科耳鼻咽喉科産婦人科
- 平成9年5月 優良病院自治大臣表彰
- 平成10年3月 高エネルギー治療装置（リナック）導入
- 平成11年4月 病院事務局内に病院建設室を設置 伝染病舎廃止
- 平成12年3月 新市立病院建設用地取得
- 平成12年12月 M・R・I導入
- 平成13年1月 院外処方全科で実施
- 平成14年7月 新市立病院建設工事着工
- 平成15年1月 地方公営企業法全部適用
- 平成15年4月 救急隊ホストライフ設置 脳ドック簡易開始
- 平成15年9月 救急医療功労埼玉県知事表彰
- 平成16年1月 病院の基本理念・基本方針を制定
- 平成16年3月 新市立病院建設工事完成
- 平成16年7月 新病院開院
- 平成17年10月 病院事業管理者（兼病院長 高元俊彦氏就任）
- 平成18年2月 彩の国景観賞受賞
- 平成19年10月 産科再開

臨床研修医 奮闘記

研修医 飯塚 泰弘（筑波大学医学専門学群卒業）

私が勤務する草加市立病院は地域の基幹病院であり、内科、外科ともに様々な症例や手術を経験することができます。また、設備が新しい、仕事をしやすい環境も魅力で、毎日新鮮な気持ちで研修に臨んでいます。

また、救急診療科では、腹痛から交通事故、脳卒中までと来院される患者さんはとても様々で、どのような症例であっても、焦らず冷静に対処される指導員の南先生について、貴重な経験を積むことができました。

現在は、外科に配属されていますが、今日の患者さんは大腸憩室からの消化管内出血の症例で、状態が安定していたため、

これまでの研修で麻酔科では術前回診、マスク換気や挿管、点滴ラインの確保など、麻酔導入から、麻酔の維持、麻酔終了までの一連の手法などを松澤先生から丁寧に指導していただきました。草加市立病院は研修医に対しても柔軟な指導方式を持っており、積極的にあれば様々な経験をさせていくことができます。これからできるだけの臨床現場に参加して、先輩医師の優れた技術と経験に学びながら、自分の将来の進路を決めていきたいと思います。

※草加市立病院は臨床研修指定病院として、全国から優秀な研修医を受け入れています。





輝く看護

～細やかな心配りで
患者さんをサポート～

現在、市立病院では約300人の看護職員が勤務しています。看護職員は医師などの医療スタッフとともに、患者さんやその家族に対して、より高いレベルの医療サービスを提供できるよう努めています。今回は医療スタッフの中でも患者さんに一番近い存在である看護職員に、普段心がけていることや看護のやりがい、喜びについて伺いました。

緊張した環境の中にも 看護の喜びがあります

6階西病棟 看護師長 森橋 明代さん

重症の患者さんが 占める 脳神経外科病棟

森橋さんが勤務する6階西病棟は脳神経外科・歯科口腔外科・耳鼻咽喉科の患者さんが入院されている病棟。そのうち約7割が脳神経外科の患者さんです。脳神経外科の場合、1か月に15名以上の患者さんが手術や病状悪化のため病棟とICUとを移動しており、重症患者さんが多いのが特徴です。

急性期から 慢性期まで 細やかな心配りを

6階西病棟はA・Bの2チームに分かれて看護を行っています。Aチームは人工呼吸器を装着していたり、あるいは2時間ごとに呼吸、血圧、脈拍などのバイタルサインを観察しなくてはならない重症患者さんの急性期看護を行っています。



ご家族の方にも 心のケアが必要

脳血管障害で入院された患者さんの場合、全く

障害がなく退院できる方はほんの一握りで、多くの患者さんは後遺症が残るため、障害を持ち続けながら生活をしなければなりません。そのため、患者さんだけではなく、介護するご家族も落ち込んでしまうことがよくあり、ご家族の方にもきめ細かな心の看護を実践しています。

看護の喜び

このような厳しく緊張した医療現場で看護をしながらも、「発語がなかった患者さんが言葉が発したり、笑顔が見られたりするなど、小さな変化が私たちの喜びややる気が私たちに伝わります。」

5人の子どもたちと患者さんのおかげで今の私がある

外来 副看護師長 浅井 和江さん

子どもたちの 協力があってこそ

小学1年生から中学3年生まで5人の子どもを育てながら看護の仕事に情熱をもって取り組む浅井さん。

子どもたちが仕事に理解を示してくれていて、会議等で夜遅くに帰宅しても子どもたちが嫌な顔をせず「おかえり！」と笑顔で迎えてくれるので、仕事の疲れが一気に吹き飛んでしまうとか。
「思春期の悩みや小さい子なりの悩みがあると思うのですが、子どもたちがお互いにそれぞれ助け

認定看護師として 活躍の幅を広げたい

外来 看護師 風巻 裕子さん

先月、皮膚・排泄ケア認定看護師に合格した風巻さんは、家族に褥瘡(床ずれ)が発生したときに、認定看

護師が行うスキンケアによって褥瘡が見るうちによくなっていくのを目標にしたりしたことが認定看護師を目指したきっかけでした。

育児をこなしながら、職場や家族の協力を得て研修に行き、夢だった認定看護師試験に合格。

「今まで学んだ専門知識や技術を用いて、患者さんの創傷、ストーマ、失禁ケアに生かせるようさらに努力していきたいです。また、意欲をみせていました。」



合って成長していく様子を見てみると、なんて素晴らしいことだろうと子どもたちに感心しつつ感謝しています。

患者さんの 存在の大きさ

そして、もう一つの人生の感動は患者さんの存在です。以前に取得した「糖尿病療養指導士」という専門資格をきっかけに多くの患者さんと話す機会をいただいたそうです。

今年の初めに患者さんと一緒に糖尿病の研修会に参加したときに「糖尿病の患者さんのつらさや痛み、悲しみが全然わか

人との関わりを 大切にしたい

患者さんと接するとき、

「このことをきっかけに糖尿病のことを一から学び直そうと思ひ、ある患者さんに「頑張る宣言」をしたそうです。しかし、その患者さんは「私たちの痛みは共有できません。でも浅井さんがそばにいてくれるだけでいいのです」とおっしゃったそうです。だからこそ、浅井さんは「患者さんの心を理解したい」と努めています。」

愛する子どもたちと接するとき、職場のスタッフや友人と話すとき、誰と向かい合うときもその関係を大切にしている浅井さん。

「長い人生の中でそのとき会った人との関わりは瞬にすぎません。しかし、たとえ一瞬でも私は多くの患者さんと交わった会話が心に残っています。私の財産の一つになっています。これからはそんな関わりを大切に、苦しいことやつらいことも楽しさや喜びに変えて、看護という仕事を続けていきたいです」と話してくれました。